第Ⅰ部

総　　論

はじめに

本巻は第5巻と同じく東南アジア地域を対象として，主にアジア経済研究所における研究活動およびその成果を振り返り，併せて今後の課題を何ほどか明らかにすべく，編集された。もとよりシリーズ全体の趣意からすれば，第5巻の「経済」と本巻の「政治・社会」とは合わせて一つのものであろう。もっとも，「経済」と「政治・社会」の2分冊にしたことがはたして適当であったかどうか，例えば，国別あるいは大陸部と島嶼部に区分するほうが適切ではなかったか，などの疑念は今なお編者において残っている。しかし「地域研究」なる学術活動が，とりわけその方法（論）において甚だ未熟であることを思えば，当面は便宜的な区分も止むを得ぬ仕儀と了承されようか。

本巻は2部から構成されている。第Ⅰ部「総論」では日本の東南アジア政治・社会研究を概観し，とくにアジア経済研究所におけるその歩みについてはやや詳しく述べた。その際，比較評価の準拠になったのは多く欧米の研究，それも理論的なものを除けば，ほとんどは編者自身が多少とも親しんできたインドネシアに関わる論著である。この意味では編者にいわば二重の「偏向」があるとは言えよう。ただ東南アジアという「地域」は，例えばラテンアメリカやアラブ「世界」とは異なり，言語と信仰のみをとっても著しく多様性に富んでいる。東南アジア全域をカヴァーすることはおろか，インドネシアとベトナムについて同程度に知ることさえも，一個人にとっては不可能事に属するのである。

第Ⅱ部はアジア経済研究所の刊行になる成果のうち11点を選んで構成した。選択については，アクセスの比較的に容易な単行書からの抜粋や，所外で出版された単行書に再録されているものは避けている。またテーマの配置上，そして特定の国への偏りを避けるなどの考慮から，あえて原著者が希望した

のとは別の論文を選定した場合もある。当初採録を予定したが，長大に過ぎる，あるいはまた短縮が困難であるなどの理由から見送らざるを得なかったものもあった。したがって，収録の論文は必ずしも原著者の「代表作」とか「自信作」とかいった意味をもつ訳ではない。念のため，このことを付言しておく。そして紙幅の関係から時には大量の割愛を余儀なくされ，こうした不本意な型での採録にもかかわらず，快く応じて下さった原著者の方々にはここに改めて謝意を表明したい。

なお，第I部末尾の「引用文献」は意図してアジア経済研究所の刊行物に詳しいこともお断りしておく。